

# J O F I 東京通信

第1号 平成26年3月2日発行  
<http://www.jofi-tokyo.org/>

東京都釣りインストラクター連絡機構会報誌

## 目次

来季に向けて	遠藤 実会長……	1
子供釣り教室への参加	國信 悠久……	2
寿	林 正……	3
南房総	中山 治夫……	3
イワナの聖地は何処に……	鈴木 伸一……	4
難しい組織の運営	阿部 敏明……	7
昨年の釣り	新井 勝之……	8
釣り場の魚たち	四条 徳明……	9
2012年度活動実績……		10
お宝コーナー……		11

井秀喜氏に、国民栄誉賞が授与された事に因縁めいたものを感じました。

平成25年は6月に富士山が世界文化遺産に登録され、9月には2020年オリンピックが東京に決まったりと明るいニュースも有りました。

その反面、大型台風による災害も多く、伊豆大島でも土石流災害で多くの犠牲者が出ました。尖閣諸島、竹島問題では中国、韓国との関係が冷え込んでいます。暮れに来て、東京都猪瀬知事の辞職、安倍総理の靖国問題など、問題の多い一年でした。我々釣りの環境も温暖化の影響か、さまざまな変化もみられ、相模湾でのキハダマグロが人気の釣り物になったのもその一例でしょう。



J O F I 東京では6月21日～23日の「富士山の日」イベントに、富士山クラブとコラボで、魚拓や釣具の展示、西川顧問の講演など、一般の方にも興味を持って頂きました。8月には「アウトドアフィッシング in 若洲」を若洲シーサイドグループと共催。30名のペア参加者に、釣りに関するミニ講義、実釣指導、魚の捌き方教室、交流会等、初めての試みでしたが、参加者のアンケートに好感触を得て、次回への開催に希望を持ちました。その他の活動も予定通り進行し、10月5日の「ふるさと清掃運動会」は小雨の中、王貞治実行委員長、奥島高野連会長等も参加され、J O F I 東京では清掃前のパフォーマンスとして、子供たちへのキャスティング模擬指導を行いました。

## 来季に向けて

遠藤 実 会長

平成25年12月、阿部副会長マンション管理組合の「クリスマスの集い」に、J O F I の何人かとお邪魔した時、マンション窓の外にそびえる東京タワーに、55年前の事が懐かしく思い出されました。

昭和33年、立教大学より長嶋茂雄選手がプロ野球読売巨人軍に入団し、同年12月には333mの東京タワーが開業しました。あれから55年、長嶋茂雄氏と背番号55で巨人、大リーグで活躍した松

11月30日～12月1日の「インストラクター資格試験」は海洋大で行われ、25名の方が受験されましたが、平成4年以降推計で3,500名超が受験。然し現在継続の登録者は約1,800名との事。新規の応募者が厳しい昨今、(一社)全釣り協には現状を把握し、旧資格者の掘り起こしなどにも目を向けてほしいものです。JOF I東京では昨年より、月一回エコプラザに於いて「勉強会」を行っていますが、今一つ盛り上がり欠けているのを感じます。釣りインストラクターとして過渡期を迎えている今、私も含め皆さん方と、技術、知識他のレベル向上に努めなければと思います。

役員改選も今年一年を残しておりますが、私も今年傘寿の80歳を迎えます。来期はもう少し若返りを図り、指導力と行動力のある世代での改革、飛躍を望んでおります。

## 子供釣り教室への参加

國信 悠久

子供の日の5月5日(日)に北区立浮間釣堀公園で第37回「子供釣り教室」が開催され、当日の指導員としてJOF I東京から勝島顧問(釣童楽会会長)、佐藤(紘)顧問、平野氏、水口さん、JOF I埼玉より小島さん、それに小生の6名が参加しました。



今回の釣り教室は朝から快晴で、格好の釣り日和。前日の風も収まり、気温も上がり、少し暑い1日で

したが、参加した親子の皆さんには楽しい子供の日になりました。

参加者 子供 48名 家族 37名 計85名。参加する子供は幼稚園児から小学生5年位までで、例年、男の子より女の子が多く、釣りの成績を見ても上位入賞者は女の子占められています。

午前8時15分に現地釣堀公園の入り口前に集まり、当日の指導、仕掛け、魚を入れるフラシ・バケツ等の配布、えさの管理、写真撮影の担当の打ち合わせを行い、受付を済ませた参加者を9時の開会式に集合をかけた。

北区区長、総務部長、生田目北区釣連会長の挨拶に引き続いて山田理事長による釣り事業内容の説明と注意事項の話があり、9時30分に釣り開始(11時45分終了)。指導員は適宜子供の間に入って、仕掛けの点検、えさのつけ方、釣った魚の張りのはずし方の指導を行いました。

子供の日のこの日は釣堀公園を半日貸切り、北区釣連の23名の役員の方と6名の公園職員によって運営され、最期に釣り場のごみ拾いして無事終了しました。釣りの対象は主に金魚とフナで、えさはキジとサシ、赤虫5個は上州屋より提供。竿は持ち込み、貸し竿 1本200円。釣った魚は子供1人につき2匹まで持ち帰り可。



この日の子供たちの釣果を見ますと、最初のころは食い渋り、そのうちあたりが出てきて木陰のある

場所で5cm位の金魚が釣れてきました。どの子も釣れたのはほとんど金魚で、昨年良く釣れた池の北と南の隅はまったく釣れず、また日向に陣取った子も釣れないため、そばの浅い池に飼ってあるザリガニやメダカ、アメンボウと遊んでいました。中には、親に連れられてきた男の子は、ミミズが気持ち悪いといって何も釣らずに帰ってしまいました。

結局、この日は成績は常連の子供たちがそれぞれ金魚を20匹近く釣り、上位を独占し、約3分の子はおでこでおわってしまいました。閉会式の生田目会長の挨拶終了後、子供たちは抽選で充電式の扇風機やリールつきのロッド等、豪華な賞品をもらい、外れた子供と父兄全員に参加賞を渡して解散しました。

高齢化が進み北区釣魚連合会の役員の方々の中には亡くなられたり、体調を崩されて人数が減り、一方、参加する子供の数も少しずつ減ってきていることが気になるこの頃です。

## 寿

林 正



林 正

JOFI 東京会員の皆様、新年のご挨拶を申し上げます。会員の皆様方のご活躍とご多幸をお祈り致します。本年もよろしくご指導ご鞭撻お願い申し上げます。

一昨年より継続されています毎月第2土曜日午後1時より実施されている勉強会、本年も引き続き滞ることなく実施されることを願っています。顧問の西川信行氏より重要な課題や問題点が提示されています。また、釣りの体験談や諸兄の研究された資料、諸諸、この勉強会で発表されてはいかがでしょうか？

会員の皆様、是非勉強会へ！ これからの釣道発展の為にご意見を！



## 南房総

中山 治夫

私は主に南房総に行っています。家から京葉高速入口が近いこともあって、釣り場は専ら房総半島を利用しています。地磯・堤防が主で沖釣りは殆どやりませんが、たまにキスをやる程度です。

釣り体験と言えば、空は晴天で、何の前兆もないのに突然潮の上げ・下げが大きくなって、そのうち膝辺りまで潮が上がってきたときにはびっくりしたのと少し恐怖さえ感じました。下げ一杯から3~4m程上がった気がします。そのときは現場から一目散に退散しました。あの現象は一体どうして起きたのだろうか？ 未だに脳裏に不思議という文字と共に深く焼きついており、この体験で海の怖さを改めて知りました。

南房総ではときどきヒラメ・マダイの稚魚や伊勢エビの子などを放流しています。ところが、心ない人がいて漁業権にも抵触するような行為をしている人を見かけます。以前から漁師の人から頼まれていて、何度か海上警察に通報したこともあります。

南房総では漁業組合がしっかりしているのか、トイレも割と完備しているし、車の管理も、場所によっては有料の処もありますが、安心して駐車できます。それに、観光スポットということもあって、ゴミは比較的少ないようです。

それでも、釣り場にはライン・ハリが散乱しているところもあります。気がついたときには、自分のゴミと一緒に持ち帰るようにしています。ゴミ問題は何処へ行っても付きまとう問題で、それこそ個人個人が責任をもって処理する習慣を身につけるよ

う、教育の一環として指導していく必要があるのかもしれない。

磯とか堤防でときどき遭遇するのが二枚潮。この二枚潮は釣り人にとっては、非常にやっかいな海流で、何年もの間その対策に苦慮しました。

書物などを参考に、試行錯誤を繰り返す中で、漸く潮になじむ仕掛けが完成できたと思っていても、その仕掛けがオールマイティとは限らないものである。その都度潮目を見ては変えていかなければならないものであるが、一度自分の中で基本が出来てしまえば、後はアレンジしていけば良いような気がさします。一旦自分のものとしての基本を会得してしまえば、後はそれをベースにして応用すればよい。これが二枚潮を攻略する私の方法です。

## イワナの聖地は何処に・・・・・・・・

鈴木 伸一

昨年10月の半ばに上高地で水生昆虫談話会の10月度例会が開催されたのであるが、その5年前に訪れたときとイワナの様子が余りにも異なっていた。あくまでも目視の範囲であるが、人目につく場所では外来種であるブルックトラウト、ブラウントラウト、およびそれらと在来イワナとの交雑種の姿が激減していた。僕の目には人知れず外来種紛いのものを駆除したようにしか映らなかったのだが、・・・・・・・・

おそらく、DNAを解析すればはっきりしたことは分かると思うが、上高地近辺には日本古来のイワナは皆無であろう。そのことを記録に残しておきたいこともあり、2008年の上高地の様子を以下に紹介させていただきたい。

\*\*\*\*\*

僕がまだ学生だったころ、明神池から流れ出す梓川の側流にそっと眼を遣ると、揺らめく梅花藻（イチョウバイカモ）の藻切れには巨大なイワナが其処此処に定位しており、眼を疑わんばかりであった。イワナの聖地とはこんなものなのかと、未だ見ぬ黒部の源流・雲ノ平の釣行を夢見ていたものである。

社会人になって、未だ季節によっては上高地へ一般車両の乗り入れが可能であったころ（1970年代中頃）、そのころには既に明神池から流れ出す梓川の側流には、ブラウントラウトやブルックトラウト、及びそれらとイワナとのハイブリッド（交雑種）は確認できていた。しかしながら、未だそれらの数

は少なく（肉眼で確認できる範囲で）、今のような惨憺たる状況になるとは想像だにできなかった（梓川本流を含め、今回の入山で見かけた100匹ほどのマス内、明らかにイワナと思われる固体は1匹たりと確認することはできなかった）。

禁漁区であるが故、ハイブリッドが容易に出現してしまうのであろうか？ 上高地の特殊な地形がハイブリッド化を容易にしているのであろうか？ 何らかの原因によりイワナが激減したところに大量のブルックトラウト（発眼卵を含めて）を放流し続けてしまったのであろうか？ こんなことは先ずあってはならないはずであるが、ブルックトラウトとイワナを掛け合わせて出来た一代雑種、または、その交配したものにさらにイワナを掛け合わせて戻し交配したもの（一見イワナに見える）をイワナと称して放流してしまったのであろうか？ 日本有数の国立公園の中で、一体誰がどのような目的で何をやってきたのであろうか？

上高地は中部山岳国立公園の特別保護地区にも指定されており、自然公園法など様々な法律により野生動物が保護されてきたはずである。それらの法律には抜け穴があったのであろうか？ いずれにせよ、国立公園内では一般の者が外来魚の無作為な放流を続けることはできないはずである。

今回の上高地入山はイワナの調査が目的ではなかったもので、以下は、僕が上高地を歩いて（肉眼で）見かけたマスについての感想である。正確性は欠いているので、その点はご了承願いたい。



今回、上高地に入山して、初めて出会ったマスは田代池のブラウントラウトであった。このマスは、肉眼で見た範囲ではブルックトラウトの特徴はどこにも出ていないようであった。



この幼魚は、背ビレにブルックトラウトの特徴である斑が明確に出ている。



一見、イワナの幼魚にも見えるのだが、左右の眼元から上唇にそって黒い線状斑が出ている（背ビレには斑はなし）ことと前記幼魚と同じ細流で見かけたので、おそらく前記幼魚と共にイワナとブルックトラウトのハイブリッドではないだろうか？



側面からの写真は撮れなかったのだが、全身虫食いの斑が入り、とてもマスとは思えぬ異様な風体をしている。こんなのが巨大に育ったらと何と思うと、何ともはや・・・・ 背筋が寒くなる想いである。



一見、ブラウントラウトのようにも見えるが、胸ビレと尻ビレにブルックトラウトの特徴が出ている固体（左右の眼元から上唇にそって黒い線状斑あり）。



すべてのヒレにブルックトラウトの特徴が出ているが、その他はブラウントラウトの特徴がよく出ている個体（左右の眼元から上唇にそって黒い線状斑あり）。



信大・上高地ステーションから徳沢辺りまで早朝の散歩に出かけた際、新村橋（しんむらばし）で折り返し、帰路は人通りの少ない梓川右岸沿いの車道を下ることにした。5分ほど下ったであろうか？左手が開け、梓川の流れが見えた辺りで、ハラハラとミドリカワゲラが路上を舞う。ひょっとしたらと思ひ瀬の弛みを注視していると、狙い通りにマスのライズが始まった！ここまですれば、イワナであって欲しいと思うのは僕だけではないと思うのだが・・・

\*\*\*\*\*

## 難しい組織の運営

阿部 敏明

長年釣りをしてきた方はご存じかもしれないが一時期、釣りクラブの全盛時代があった。

磯、投げ、溪流、ヘラ、鮎、ルアー、狙う対象魚は違っても××会、○○同好会、△△研究会、□□魚名会、・・・と色々な釣りの会が作られた。しかし、今では残念ながらほとんど残ってはいないし又活動もしてないのが現状である。原因はいろいろと考えられるがこれは次回に廻すことにして活気に満ちた素晴らしい多くの釣りの会を振り返ってみると、納得できる要素が存在していた。

当時は趣味としての釣りが大人気であり、従って釣りをしたい初心者にとっての近道はクラブに加入して釣法の腕を磨くのが手っ取り早い方法であった。おまけに有能な指導者も多数いたのが幸いし、また、揃えたい釣り具に関しては釣り具店や誌上の情報ではなく会員から適切なアドバイスをすることもできた。

それに伴い目的が確立されていて狙う釣り魚の記録や夢を持つことができ、しかも信頼できた会員相互の暗黙の上下関係（初心者、中間、ベテラン、師匠）が出来あがっていたのも事実であった。

会員同士の活発な個人釣行によって、個々のターゲットが広がっていき釣友も増えていき、クラブの活動に大きなメリットのあったことは見逃すことを出来ない。それは安全面の重要性すなわち組織で釣行するので事故が少ないし、万一の場合はチームワークによりリスクは最小限に食い止められることにより団体行動の自覚が養われたのである（例として、チャーター船の場合、料金は頭割、ドタギャンは皆に迷惑をかけてしまうことになる。また、頭割のメリットとして釣行にかかる交通費、餌代、コマセ代も安くなる場合もある）。さらに、釣果があれば料理を学べるし、釣果を歓迎してくれる家族は勿論友人が増える（生き締め、下ろし方、旬の魚）。

会の組織が大きくなってくると会員の疑問、質問が多くなる為に勉強する機会が多く成り会員のレベルの向上につながっていく（釣り場のポイント、潮、仕掛け、エサなど）。また、原稿依頼やマスコミ関係者との交流が活発化していくので知名度もあがることになる。

所属する会の団結が強くなってくると、会の名前を汚さない、釣り座の譲り合いのなどの精神が生まれ、環境を大事にする、釣果の競争、記録挑戦などにもつながっていく。

芸術的学習もあった。それは記録の証明として魚拓の作成・提出などである。現在ではあまり見受けられない、他の方法として記録というか記念というか石鯛、石垣鯛、口白の歯の保存、剥製、現物のアルコール漬け（記録物、稀少価値、研究用）等々。

会員同士での道具の提供（竿やリール）・修理（竿に漆塗り）も行われていた。釣り具店には販売していない木製カニ箱、手造りウキ、クエ用竿受け（車のスプリング代用）などなど会員のオリジナル用具は現在では入手不可能となってしまった。

また、例会とは毎月の決められた釣行以外にも、遠征釣り、ボランティアの釣り教室、他クラブとの合同釣り会などコミュニケーションには最高の舞台であった。そして、締めは年一回の新年会及び総会の開催で、会員や関係者などによる懇親会、釣果発表と表彰式等々、大いに盛り上がったものである。

### まとめ

かつては釣り大好き、魚大好きが沢山いた。休日だけでは釣り足りず、休暇としては釣りに行く。小遣い、給料の大半は釣り資金。釣れると聞くと、何処へでも弾丸ダッシュ。釣りの話題ならば徹夜で飲み食い。遠征釣りと言っては不倫旅行の完璧なアリバイ工作。ハマりにハマって女房子供と別居。マイカーのトランクは常に釣り具で満杯。土方ファッションでは女性にもてず、生臭いと嫌われ、釣りの話は嘘の連発。

坊主逃れで立ち寄る魚屋の常連客。生きがいとは聞かれれば、大きな声で“釣り”と一言。例え冠婚葬祭があろうとも、釣り大会が最優先。釣り餌は伊勢エビだろうが鮑であろうが惜しげもなく、自分の弁当はといえぱのり弁当で我慢。新聞読むにも先ず釣り情報から、本屋へ立ち寄っても釣りの本は買わずに長時間の立ち読み。同僚に顔の日焼けを聞かれても、目線下向きに“庭仕事”と嘯く。二日酔いには減法弱く、船酔いには抜群に忍耐強い。テレビの釣り番組、誰彼問わず断固譲らず独占。女房買ってきた魚介類、嫌味交えて苦情の連発。釣り資金稼ぐと言っては深夜の内職、仕掛け作り。釣らせる船長には笑顔でおもてなし、釣れない時は恨み倍返し。入れ食い時は“釣るなら”今でしょ！

かつてはこのような釣り師が沢山いました。だから火がついたようにブームになったと思う訳です。

## 昨年釣りの

新井 勝之

私は溪流のフライ・フィッシングが主体です、昨年は大雪と春の天候不順で東北の山間部の雪解けが遅く6月15～16日に山形県鳥海山水溪への釣行が初釣りになってしまいました。6月初めに行く予定でしたが、雪代と雨の影響で伸びてしまい、しかも前日からの雨が降ったり止んだりで、……

水温の低下と増水で釣果に不安を感じながらのスタートになりましたが、案の定、魚の反応は今一でした。その上 もともと滑りやすい河原が雨のせいで 慎重に遡行しなければならず、精神と肉体にもダメージを与えるハードな釣りになってしまいました。

1時間ほど釣り上がると開けたプールで、水温が上がったせいかライズを発見し、慎重にフライを流すと一発でヒット。久々の手応えを味わい同時に喜びを感じながら、ラインを手繰り寄せ 魚をネットイン。24～5センチの丸々とした岩魚でした。その後も同じポイントで4匹ほど釣り、別の場所で2匹を追加し、その日は早めの終了。翌日は雨も止んだので、同じ川での釣りでしたが前日より魚の反応もよく、10匹ほど釣ったところですっかり気を良くし、別の川に行ったものの、そこではさっぱりで、帰路に就くことに。



釣れたポイントで、同行の友人T君



釣れた岩魚君

8月に山形に帰省(妻の実家、東根市)した際に、当初は寒河江川にてアユ釣りを楽しむつもりでしたが、2週間ほど前の記録的な集中豪雨で川の濁りが酷くアユ釣りが出来ない状態でした。そこで、この時期余り実績がない寒河江川上流域のC&R区間に行く事に、

現地に9時頃到着し、川の様子を見ると濁りは無く、幾分多めの水量で釣りは可能な状態でしたが、豪雨の爪痕で護岸が崩れているし、川にはいたる所に流木やごみが岩に引っかかっている、川底は上流からの砂が体積していたので、魚の反応が危ぶまれる中でのスタート。

入渓した淵で釣り始めると 間もなく流れの緩いところでライズを発見した。すぐに其処へフライを流すとヒットし、3番ロッドが大きくしなり 大物の手応え。慎重にやり取りし ネットイン。35センチの体腔のあるニジマス釣り、不安が一掃できるとむしろ釣れそうな予感に変わりました。同じポイントでニジマスを2匹追加し、その後移動するポイントごとに釣れて、100m位の間で20匹ほど釣れました。中には、掛かるといきなり下流に走り、8番の針を曲げて逃げた強者には悔しさを感じずにはられません。久々に「魚と遊んでいる」を実感しましたので、早々に切り上げて明日に備えました。翌日も同じ場所で釣ることにしましたが、前日より反応は悪いものの、37センチのニジマスを筆頭に15匹ほど釣ることができ、満足のいく釣行でした。



ここで、その幾つかを紹介しよう。

## 1. アジはバスのお客さん

関東で一番ポピュラーなアジの船釣り（ビシ釣り）は、一握りのイワシミンチ肉をコマセ籠に詰め、その先に2mくらいのハリスに2～3本の釣り針を付け、食紅で赤く染めた米粒大のイカのさいころを餌に付ける。

魚探で群を見つけた船頭から「底に錘が着いたら1m上げ、竿をゆすってコマセを振り出し、もう1m巻いてアタリを待つように」と指示が出る。アジはタナが50cm違って喰わないときがあるから、皆が一斉に指示タナまで正確に仕掛を下ろす。

東京周辺の遊漁船の定員は40人前後で、定員一杯乗せると釣りにならないので、普通は半分、20人位乗せている。片舷10人なので両手を広げた間隔で竿を出し仕掛けを下ろす。観音崎沖などは数十隻集まり、隣の船と仕掛けが絡まってオマツリするほどなので、アジから見ると頭の上に無数の針がぶらさがっているわけで、船毎には丁度バスの乗客（魚）と吊革（釣り針）の関係である。

バスの吊革は床から2m弱、座席に座って吊革が揺れるのを見ると、アジはどの吊革に掴まろうか迷うだろうと考える。バスは停留所（釣り場）でお客を乗せる。混雑時（魚が多い）なら少し高さ（タナ）が合わなくても汚れていても、お客は争って吊革に掴まる（よく釣れる）。

ラッシュ時間でも前のバスが行ったばかりならお客は少ない。空いていれば皆座るから吊革には掴まらない（釣れない）。それでも立っている人は吊り広告とか路線案内など興味（仕掛けの工夫）のあるところの吊革か、揺れる時にそばの吊革に手を出す。（風が良すぎると釣れない）。

アジは、喰いが良い群に当たった時は一束（100）を超えることもあるが、魚探反応があっても殆ど餌を追わない時もある。釣り人は釣れないと不満たらたのだが、釣り師になると一束も釣るとあとの始末も考えるので、近所へ配る分も含め30～50も釣れば満足する。それより釣れないときにいかに喰わせるか、船中ツ抜け（九ツを超える）がいないときに自分のオリジナル仕掛け（車内吊り）、竿さばき（誘い）で一人だけ2桁釣りをしたときが一番嬉しいのである。



入渓地点から上流を撮影

## 釣り場の魚たち

四条 徳明

「釣り場の魚たち」とは、魚の心を知った釣り人の独り言。

職場の人たちから「広い海に細い糸一本垂らして、いるかいないかわからない魚を待っている気が知れない」と云われ、家では「海にはなにか魚がいると思うのに、小魚一尾釣ってこないのはどうしてか」と聞かれる。釣り人も同じ思いで糸を垂らし、ボーズの言い訳もするが、そこに釣りの面白さ、深みがあることを理解し易いように話しをすることがある。

最近遊漁も機器や道具が発達して、船はGPSで今何処にいるか魚群探知機はメートル単位で分るようになってきている。釣具も1mごとに印の付いた道糸、10cmまで計れるカウンターの付いたリールを使い、竿も魚種別、釣り方別に売っている。

釣り場に着くと船頭が「底から2m」とか、「水面から27m」とかタナを指示してくれるので、全員がそれを目標に仕掛を落す。そして、50mも深いところの爪の先ほどの針に魚を掛けようとして、水中の餌の動きを演出するため竿を動かし、糸の変化に神経を集中するのである。

釣をしたことのない人に釣りの面白さを話すと、魚たちはどんな状態なのか擬人化して話しをすると、案外面白がって聞いてくれる。

## 2. クロダイは試食コーナーの紳士

ワイフの買い物でデパートにつきあわされた紳士、帰りがけに夕食の買い物も、と地下の食料品売場へ降りていくと、あちこちでマネキンガールが試食品を勧める。ソーセージ、漬物、煮豆、お茶、ワイン・・・・・・・・

皆が軒並み試食していて紳士もうまそうだと思っても、ワイフはメニュー材料でない素通りしていくので紳士にはなかなか手が出しにくい。ワイフの目がちょっと離れたすきにサッと1串もらって半分かじり、納得した顔で残りを口に入れる。同じサンプルには二度と見向きせず次のマネキンも通り過ぎ、また食欲をそそるところでもっともらしい顔をしてつまむ。

クロダイは警戒心が強くせに雑食、どん欲で、餌はエビ・カニ、虫、貝、のり、練り餌からスイカまであり、海釣りではこれほど餌の種類の多いものはない。メバルやアイナメの仔など周りにうるさい輩がいるときは押しのけて餌を追うことはなく、皆の見ていないときに餌が目の前に来たら、少しカジって口に合うことを納得したらガブリと喰いつく。堤防のクロダイ（へチ）釣りは、まさに食料品売場の紳士に試食させるのと同じで、どうやって食欲をそそる餌を口へ届けるかの面白さである。

## 3. サバ・ワカシはバーゲン会場のおばさま

サバはどこでもサバで通るが、ワカシ（ブリの仔）は出世魚で成長するにつれて名前が変わり、地方名も多い。どちらも群をつくって海面から中層にかけて回遊し、アジ釣りやタイ釣りの外道としてよくお目見えする魚であるが、針にかかるとぐるぐる泳ぎ廻るので周りの人とオマツリしてしまい、解くのに大変なので、中・小サバが釣れるとカモメに投げてやることもあるほどの嫌われ者である。

それでも、ワカシは関東では秋口にワカシ釣りの船が出たり、投げ浮き釣りの対象にもなるが、サバはあくまでも外道で、サバ釣りの遊漁船は見たことがない。サバもワカシも群さえくれば仕掛けも腕も全く関係なく釣れるから釣りとしてはつまらない。しかし、何も釣れないときは引きも強いし、秋も深くなると脂がのっておいしくなるので、たまにもって帰ると結構喜ばれる魚である。

デパートやスーパーのバーゲンやタイムサービスがあると、どこで知ったかたちまち集まってきて、手当たり次第にかき回し、目玉商品だけ買いまくり引き上げていくおばさま達をみると、タイ釣りにい

ってサバにかきまわされたときを思い出してしまう。

糸が太くとも針が大きくとも、餌は弁当の沢庵でもウエス（ぼろ布）の端でも喰いついてみるサバやワカシであるが、沖上がりも近づいてボーズよりはマシと狙う時は、飲みを誘った若い子に体よく断られ、仕方なくガード下のママさんをからかいに行く部長さんである。

## 4. マダイは立食パーティーの主賓

立食パーティー会場は、シャンデリアの輝くホテルの大広間。挨拶、乾杯が終わると参加した人たちは一斉に料理卓へ集まり、仲間うちのグループが出来、パーティーの主旨に関係なく活性化する。

パーティーの大物はメインテーブルからあまり動かず、次々と挨拶にくる人たちと話を継いでおり、気を利かしたコンパニオンが見栄えよく取り分けた料理を持ってくると、うなずいて少し口をつけるだけ。

参加者の中で、この機会にパーティーの大物とお近づきになりたい、せめて名刺一枚お渡ししたいと思っている人は、ぜひ、マダイ釣りを勉強すると良い。

大物を釣るには、釣り場（会場）の配置、流れの方向（雰囲気）や強さ（参加者数）、撒き餌（料理）に集まる小物の動きなどからシミュレーションして、自然の流れのように違和感無く目標（大物）に付け餌を流すか（近づくか）を決め、あとはタイミングを計ってうまく合わす（名刺を渡す）のである。

ただし、あまり大物を狙うと竿をノサレ（引き込まれ）たり糸切れしてしまい、周りの魚も一緒に二度と餌を追わなくなるので、自分の仕掛け（身分）と相談して狙うことを覚えなければならない。

## 2013年度活動実績

日付	活動実績
03/03（日）	平成25年度定期総会開催
03/22～24 （金・土・日）	2013 国際フィッシングショウへの参加 ニジマス釣り等のサポート

03/22 (土)	釣りインストラクター・マスター研修会への参加
05/19 (日)	親子マス釣り懇親会 マス釣り & BBQ
06/02 (日)	隅田川へ子供たちが稚魚放流への参加 稚魚放流サポート
06/16 (日)	第27回鋸南町白ギス釣り大会への参加
07/27 (土)	日釣振東京都支部主催 第8回若洲海浜公園親子釣り教室への参加 釣り指導サポート
08/17 (土)	第1回アウトドアフィッシングスクール in 若洲への参加 釣り指導・魚の捌き方サポート
08/18 (日)	全磯連関東支部主催女性・少年少女釣り大会への参加 釣り指導サポート
09/29 (日)	J O F I 東京懇親釣り会
10/05 (日)	ふるさと清掃運動会実行委員会主催 ふるさと清掃運動会 in 荒川に協力参加、及び模擬ルアー・キャスティング教室実施
10/12 (土)	日釣振東京都支部主催 若洲海浜公園第8回シニア釣り教室への参加 釣り指導サポート
10/20 (日)	「水辺感謝の日」清掃デーへの参加
11/03 (日)	みんなで遊ぼうフィッシング祭りへの参加 釣り指導サポート
01/30~12/01 (土・日)	25年度全釣り協公認釣りインストラクター資格講習・試験スタッフ・講師を派遣

## お宝コーナー

### 1. 郡上魚籠



25年ほど経ったであろうか？ 初めて郡上八幡に行った年、ちょうど郡上踊りの時期であった。嶋さんのお宅へアポもとらずに伺ってしまい、今は売り物がないと言われたのだが、何故かショウケースの中に先代のものと一緒に展示してあった左の7寸ものを譲って頂いた。

後になって分かったことであるが、その当時でさえも、嶋さんの郡上魚籠を手に入れるためには、サイズによっては予約しても1年から2年は待たねばならなかったそうだ。そうそう、そのころのものには、上部の口元に張ってあるネットを絞るゴムひもに嶋さんのトレードマークである竹細工の瓢箪が付いているのが特徴である（鈴木 伸一）。

### 2. Winona Lake Fishing Reel



リールの起源を詳しく調べたことはないが、英語で書かれた書物にリールが初めて登場したのは、1662年に Venable によって記述された “The Experienced Angler” と言われている。また、1195年に中国の画家 馬遠によって描かれたとされている絵画には、湖か大河で短竿とリールを使用して引き釣り？をしている人物が確認できる。

米国でもいつごろのことかは分からないが、ウィノナ湖で先住民が使用していたとされる、スプール口径の大きなトローリング用片軸受リールが存在していた。このリールはその改良版で、1930年代、または1940年代に製造されたものと推測する。



ワッシャーを使用した極簡単なドラッグ機構は備えているが、ストップ機能は備えられていない。魚とのやり取りはリール・シートにスプールを取り付けるためのシャフトに穴があげられており、指を使ってのサミングにより行う。

たまには、こんな古の釣り具も使ってハーリングを楽しんでいます（鈴木 伸一）。

## 編集後記

今回で2回目の編集となりました。夏ごろから準備を開始したのですが、特にテーマも決めず原稿を集めたのが拙かったのか、原稿がすべて集まったのは年も暮れようとした頃でした。

今回は、釣り教室や釣行の報告、長年かけて習得した釣りの奥の手、環境問題、JOFI活動への提言、釣り界の変遷・課題、エッセイなど変化に富んだ原稿が集まりました。編集者の努力が足りないこともあって、未だ原稿を書きいただける方が限定されているようで、今後はテーマを決めて幅広く会員の方から原稿を募る努力をしていく所存です。どうぞご協力よろしくお願いたします。

現在継続しております勉強会ですが、遠藤会長からも言われていますように、参加される方が固定化され今一つ盛り上がり欠けているようです。今後は多くの方が興味を持って参加していただけるように、西川顧問にもご協力を頂き広報部で企画を練っていきたく考えています。いずれは勉強会での成果も会報に載せていきたく願っております。

本会報誌は皆様からの寄稿の様子を見て適宜特集を組んで発行していきたいと思っております。原稿は随時募集しておりますので、会員名簿を参照し広報部宛にEメール、又は郵送でお寄せください。勿論、集まり具合によっては期限を切って募集することもありますので、その際はどうぞよろしくお願いたします。（N. S.）

東京都釣りインストラクター連絡機構会報誌  
第2号

発行日 平成26年3月2日

発行 JOFI東京

(社)全日本釣り団体協議会 公認

東京都釣りインストラクター連絡機構

編集 同上（広報部）

URL <http://www.jofi-tokyo.org/>